

夏季教化研修会



8月22日、尾張大國霊神社を会場に、恒例の夏季教化研修会が開催され、県内神職70名が出席した。

午前9時半に尾張大國霊神社正式参拝の後開講式に移り、白井副庁長より、「先般、神社新報を読んだところ、昨今、修学旅行での伊勢参拝は少なくなっている中で神宮の宇治橋の手前で中学生の団体が記念写真を撮っていたとの記事があった。若い方々に神宮を知り親んでもらうためにも、各支部において世代を超えた総参宮を呼び掛けて欲しい。本日の講習がそういった行動の力となることを願っている」との挨拶の後、研修に入った。

まず、三浦正典教化委員長より、昨年12月2・3日に神社本庁にて行われた全国教化会議の詳細な報告があった。昨年度は神社本庁教化実践目標3カ年の最終年であり、その総括の意味で各県より活動報告があったこと、更には次期の目標「氏子意識の啓発と家庭のまつりの振興を目指して」が設定されたことが報告された。

続いて、今年の神宮式年遷宮遷御の儀の際に三重テレビが制作したビデオ「お伊勢さん」が上映された。



午後は、尾張大國霊神社宮司山脇敏夫氏による「国府宮はだか祭と御修造事業」と題しての講話があり、氏はまず神社の在る稲沢市について語り、次いで一の鳥居から境内神社まで画像を使用しながら神社の歴史について語られ、境内の歴史の変遷の中での儼追殿の位置付け、またその新築への経過を述べ、費用対効果ではない境内の維持・整備に努めるべきと語られた。更に、続日本紀の称徳天

皇の吉祥天悔過の項から厄とは地域の五穀豊穡が欠けた状態を言い、本来は地域社会の祈りであったとされ、尾張のそれを行っていたのが尾張大國霊神社であるとされた。そのような神社を更に後世に伝えるべき造営工事を行ったとしその経過について詳細に語られた。神社とは大いなる命の源であり、神様に毎日お食事を差し上げるのが第一で、そのために器も境内も清浄に保つのが基本であると語られた。

次に参加者を6つの班に分け、奉務神社における厄祓い厄除け神事についてグループ討議を行った。各自奉務神社の実例を紹介しつつ討議を行い、最後に各班から1名の代表を選出して全体会にてグループ討議の内容を発表した。厄祓いの神事には個人の祈禱と地域社会での祈禱があり、前者は、個人がその年齢にあつての役割がやや希薄になってきていることが問題でありその意味を啓発しなければならない、後者も地域によって様々な形があるが、その目的は地域社会の安定的な維持であるが、それが揺らいでいるのも問題であるとの意見があった。

閉講式では三浦正典教化委員長より受講者代表知北支部森岡正視氏に修了證が手渡され1日の研修を終了した。